

るべし、

○食法ノ事ハ、尙ホ禮式部饗應篇ニ在リ、宜シク參看スベシ、

〔書言字考節用集六服食〕御煮ナ管ナ先ニ尊ニ者ニ賞ニ調ニ味ニ云ニ爾ニ、或

〔倭訓栞前編四十五〕おにぐひ 鬼喰の義成べし伊勢物語に、鬼一口に喰てけりといへるより、先

一口喰をもていふ成べし、瓜に禮とするは、禮玉藻に、瓜祭上環といへる是也、注に上環横切之、圓

如環也とみゆ、

おにとり 鬼取の義、鬼喰に同じ、秦時尙食を置いて膳を進るに、先嘗る事を掌ると見ゆ、本朝の内膳の職是也といへり、鬼といふは浮屠家の生飯より出たる詞にや、さばの下、考ふべし、

〔今川大雙紙下〕食物之式法の事

一貴人の御前にて、飯の鬼をする事、かさを取て御めしの上をばとらず、左の方のそばを執べし、

〔令義解職一員〕内膳司

奉膳二人掌總知御膳進食先嘗謂在御所而嘗之、凡玉食、瑠食、欲登天、供膳官嘗事、

〔古事談二〕堀河左府源俊房知足院殿藤原忠實ヲ賀ニ奉取賞翫之餘、常被奉仕陪膳、每進汁物先喫試

テ氣味調タルニ、飯ヲ漬テ被奉ケレバ、無便トオボシナガラ食給ケリ、其由大殿師ニ被語申ケ

レバ、暫御案アリテ被仰云、左府モ可然之人也、有何事哉云々、

〔式正秘傳書〕一御祝之度、酒井雅樂頭御膳手ヲ付上ル、雅樂頭ニモ足打ニテ三迄ノ御料理被下之、

〔東照宮御實紀附録十四〕伊達政宗茶臼山の御陣へ參り、御物語の序にかゝる騷擾の折は、人心計

りがたければ、朝夕の供御などもよく御心付らればよからんと申上しに、尤の事と聞し召

し、是より供御聞しめすに、御にとりの役立置れ、後々までも、三河以來譜代の者もて、その役にあ

てらるゝ事となりぬ雑話筆記